

# 永観の往生思想における三論教学位置付けの再考

舍 奈 田 智 宏

## 一 問題の所在

これまで、永観の往生思想を考察するにあたり、当然のようにその前提とされてきたのが、永観が三論僧であり、その往生思想は三論系の浄土往生思想であるとされてきたことである。しかしながら、その前提は本当に正しいのであろうか。本稿では、これまでの研究において、永観の往生思想の、さらにはその念仏行の中心の一つである法身同体、その構成において重要な位置を占めるとされてきた、三論教学の影響、特に一切空思想について、どのような影響があるのかを改めて考察してみたと思う。

## 二 永観における三論教学の影響

まず最初に、確認しておくべき点は、永観が古来より三論僧と位置づけられてきたことである。筆者は、学位請求論文において、永観の真言僧としての一面からの考察を主眼において主に研究を進めた。ただし筆者も、学位請求論文では真言僧としての一面を強調し、真言僧の一面からの考察を中心に行ったが、決して三論僧としての立場を完全に否定するわけではない。以下になぜ永観が三論僧と位置づけられてきたのか、まとめてみた。

一般的に永観は、若い頃東大寺東南院におり、史料においても東大寺東南院を本寺とする三論僧として位置づけられる。『東大寺別当次第』には、

前律師永観。禪林寺。康和二年五月廿一日任。年六十八。三論宗。本寺東南院。八幡別当元命三男。有慶深観両大僧都資<sup>①</sup>。永観の項に本寺を東大寺東南院、宗派を三論宗としている。凝然の『浄土法門源流章』にも、

中古有三論永観律師。兼歸淨教。作弥陀要記往生拾因等<sup>②</sup>

とあり、鎌倉時代には永観は三論宗を本宗とする僧侶という位置づけが、既にされている。このような古い資料においても、永観を南都三論宗の僧侶と位置づける傾向が強い。

また『往生拾因』の末尾にも東大寺沙門と記されていることから、現在の研究においても、井上光貞氏をはじめ、永観を三論僧と位置づけることが多い。また元興寺智光（七〇九〜七八〇?）に代表される奈良時代に既に見られる南都、特に三論宗における往生思想の流れの中で、永観を平安後期に現れた三論宗の往生信仰者の一人として見なされることもある<sup>③</sup>。加えて永観が、出家後最初に入った東大寺の東南院が、三論と密教を兼学する院家であることは、これまでも指摘されるとおりであり、師匠の有慶は三論の高僧であり、『東大寺別当次第』にも、

有慶深観両大僧都資<sup>④</sup>

師僧に真言僧である深観と共に、三論僧である有慶の名が記されている。また永観は法会などにおいて、

承暦三年 講師永観東大寺三論宗<sup>⑤</sup>

三論僧として出仕していた。このような史料から永観をこれまで三論宗の僧と位置づけられてきた。

### 三 先行研究にみられる法身団体における

#### 三論教学の影響

また永観が、三論僧であると古来から位置づけられてきたのと同じく、これまでの先行研究においても、永観の往生思想は、三論系の往生思想と位置づけられてきた。例えば、永観の著作である『往生拾因』第七三業相応において、

法華玄云。口業称名必具三業。発声口業動舌身業。経意意業。身業礼拝具身意二業。意業存念唯意業也。已上。<sup>(8)</sup>

称名念仏が三業に相応する行であることを述べるために、三論の大家である吉蔵の『法華玄論』を用いている。また第八三昧発得において三論僧である智光の説話を、

元興寺智光頼光從小年同室修学。(中略)智光夢覺。忽命書工令図夢所見淨土相。一生観之終得往生。已上。<sup>(9)</sup>

引用していることなどからも、永観の往生思想に三論宗の影響が指摘されている。さらに永観の三論教学の影響の最も大きな点とされるのは、『往生拾因』における念仏行の中心と位置づけられる第九因法身団体であろう。先行研究においては、三論教学における一切諸法無自性空の思想が、法身団体思想の中心的なものとして理解されてきた。

たとえば明山安雄氏は、永観が三昧発得、法身団体観を説いていることを挙げて、

以上述べてきたような深い観法を説いた理由として、善導の思想（とくに「観経疏」散善義を中心に）を吸収するに当って永観自らに既成していた法身団体説などによって指摘出来たように、全く聖道門の思想——（三論教学）——見解の立場から脱し得なかった事は当然の帰結と云はなければならず（以下略）<sup>(10)</sup>。

と述べている。香月乗光氏も、永観の一心三昧発得の念仏行や法身団体

観を説いたことを挙げて、

永観が散善義によって随順本願を説いたにも拘らず尚このような深い観法を説き、はげしい修道を勧めたことは、結局三論宗の立場から脱し去ることができなかったからである。<sup>(11)</sup>

と指摘している。他にも浅井圓道氏は、

つまり真言宗の阿字本不生観、三論宗の八不中道観によって衆生に遍満する法身理を悟るというわけであって、ここにも深観ゆづりの真言宗、自分の本分の三論学という素養が顕れ出てくる。<sup>(12)</sup>

と指摘し、三論教学の影響を示唆している。永観の研究を数多く残されている大谷旭雄氏も、

法身団体とは三論でいう体空観といえる。<sup>(13)</sup>

再論すれば、念仏宗は永観の所依とした東大寺三論と決別することなく主張されたものであり、三論宗の主眼と帰結、つまり一切衆生の病患たる有所得の執見を治息し、そこに顕現する無所得の円理（諸法無自性空無我・法身団体）に通達せしめようとするなかで、法身団体の観法を説き、末代における観法成就の唯一の手段・実践として弥陀の本願に随順する念仏一行に注目し、これに甚深の確信をえたところに念仏宗と称する理由が存したといえよう。<sup>(14)</sup>

と述べられている。ここに挙げたもの以外の研究においても、永観が三論僧であり、その念仏行の中心となる法身団体にある空思想は、三論教学の影響を受けたものであり、ゆえに永観の往生思想は三論教学の枠内で論じられるものとされることが多い。

以上先行研究において指摘されるように、三論教学は、永観の往生思想、特に第九章にあたる法身団体において重要な役割を果たしていると考えられてきた。

## 四 法身同体における一切空思想の位置づけ

では実際のところ、法身同体における三論教学の影響とは、具体的にどのような点にあるのであろうか。

法身同体思想における三論教学の影響とは、一つには、法身を意味するものとして、阿字門中の本不生と並んで、

今法身者人阿字門悟一切法本不生際。是則中論所説八不之中第一不也。謂縁生諸法各無自性。無自性故本不生也。<sup>(15)</sup>

『中論』の八不の第一、即ち不生がまず挙げられる。

第二に、法身同体の中核とされてきた一切諸法無自性空という思想である。一切諸法が無自性空であるが故に、衆生と阿弥陀の法身が同質であり、同体を観することができると。この一切諸法無自性空という思想が、空思想を重要視する三論教学、またはその大きな影響であるとされてきた。

では、永観は、この一切諸法無自性空を説くに当たり、この他どのような論書を引用しているのだろうか、挙げてみると以下のようなになる。まず、法身同体冒頭では、『無量寿経』を引用している。<sup>(16)</sup>

双卷経云。通達諸法性一切空無我。専求浄仏土必成如是刹。他には空海の『最勝王教秘密伽陀』、

故有文云。我由無明妄三業夢裏造作衆罪障。乘覺思惟無作者。我心如空。罪何住。<sup>(17)</sup>

『華嚴経』

故華嚴経云。了知一切法自性無所有。若能如是解即見盧舍那。已上。<sup>(18)</sup>

『奮迅王経』

如奮迅王経中説。遮魔語金剛齊菩薩言。我一千年観汝心行常求汝便。而不能得。菩薩比丘言。假使於恒沙劫求我心亦不可得。心不在内不

永観の往生思想における三論教学位置付けの再考

在外。不在二處。不在中間。魔言。若汝無心云何去來亦有言説。比丘言。如幻人有去來言説。故仏常説諸法如幻。已上。<sup>(19)</sup>

『心地観経』

心地観経云。如是心法本非有。凡夫執迷謂非無。若能観心体性空。惑障不生便解脫。已上。<sup>(20)</sup>

以上のような経論を引用して一切空無我、自性空といった一切諸法無自性空無我の思想を説いている。確かにここで永観が引いた経論には一切空や、諸法の無自性といったことが説かれている。しかしながらその経論は、『無量寿経』をはじめ、空海の『最勝王教秘密伽陀』、『華嚴経』といったものであり、いわゆる『中論』や『十二門論』、『百論』といった三論教学の中心となる書物や、三論系の人物（吉蔵など）の著作を用いたりしていない。すなわち最初に挙げた二点の文以外では、一切空を説くにあたり三論系の論書を引用していないのである。もしも三論教学を中心に据えるのならば、空海の『最勝王教秘密伽陀』や『華嚴経』よりも、もっとふさわしい経論があつたはずである。しかし、一切諸法無自性空を説くために永観が引用した経論は、いずれも三論教学を説くものではない。無論そこには、一切諸法無自性空無我の思想が説かれないうものではない。だがこの法身同体が三論教学の空思想に基づいたものである、というこれまでの永観研究の基本的な解釈（永観の往生思想、特に法身同体が三論教学の一切空思想に基づいたものであるという）からすれば、永観の用いている経論が、三論教学を説くものではないというのは、説明がつかないと言わざるを得ない。

もちろん法身をあらわす部分における『中論』と、それに続く僧肇<sup>(21)</sup>（三八四～四一四）の著作である『肇論』からの引用、

肇公云。道遠乎哉。触事而真。<sup>(22)</sup>

に見られるように、三論教学に影響を与えた論書を引用している箇所もある。また以下の

非唯衆生心。諸仏心亦空。凡心性一味迷悟不二。仏心中衆生迷迷無所迷。衆生心中仏悟悟無所悟。実心性空不生不滅不常不断不一不異不來不去。無相可得畢竟無念。以無念故即無染著。無染著故自性清淨。<sup>23)</sup>

という一文にあるように、『中論』の八不を参照しつつ、永観自身の言葉で、一切空を説いている箇所もある。

だが、『中論』は、直接的に用いているのは、八不（特に不生）のみであり、僧肇の著作の引用も僅かな部分でしかない。三論教学を説く論書の引用は、その他の一切正法無自性空無我の思想を説く論書に比べると、明らかに少ないのである。

すなわちここまでの考察から、これまで、三論教学に基づくと考えられてきた、法身共同体における一切諸法無自性空無我という思想が、引用されている経論から考えると、かならずしも三論教学の影響のみに限定して説かれているわけではない、ということが指摘できる。

さらにこの永観の経論の引用における姿勢から、一切法無自性空とは、三論教学ではなく、むしろ通仏教的な意味で用いられる空思想の視点ではないのかと考えられるのである。

もちろん一切空という思想は、永観の立場や、吉蔵の著作、智光の伝記の引用など、『中論』の影響等から考えれば、この法身共同体における一切諸法無自性空には三論教学の影響もあると捉えるべきであろう。ゆえに、法身共同体の中身は、確かに大谷氏が述べるように、ある意味で三論教学における体空観でもあったといえるのであり、三論教学も、法身共同体の思想を形成する重要な要素であることに変わりはない。

しかし法身共同体の冒頭に引用された『無量寿経』にも見られるように、一切諸法無自性空無我という空思想は、様々な経論において説かれる通仏教的な基礎的な思想である。確かに三論教学において空思想は強調されるが、三論教学のみにおいて空思想が説かれるわけではない。つまり

厳密な意味で法身共同体に認められる三論教学は、法身を意味する『中論』における八不の（特に不生）のみである。つまり一切諸法無自性空無我の思想が法身共同体において説かれるとはいえ、その空思想は、三論教学というよりは、通仏教的なものであり、その通仏教的な空思想の一部に三論教学が含まれているとみるのが妥当ではないかと考えられる。

では、三論教学の影響を含めた空思想とは、法身共同体思想の中でいかなる位置づけにあるといえるのだろうか。ここで考えたいのは、法身との関連である。すなわち『往生拾因』の法身共同体において、法身とは『大乘起信論』などの如来蔵思想を中心に説かれている。加えて『中論』の不生と、この三論教学を含めた一切諸法無自性空無我の思想も間違いなく、その法身観の構成の一翼を荷っている。だがむしろこの三論教学の影響とは、法身を示すというよりも、法身の性質に一切諸法無自性空無我という意味を加えることによって、むしろ同体という面をより強調しているのではないかと考えられる。

すなわち法身が、無自性空という性質を持っているが故に、さらには法身も含めた一切の諸法が、空であり無自性であるが故に、衆生の法身と、如来の法身が不二の存在であり、この二つが同体であるということにより明確に表しているのではないだろうか。つまり凡夫の法身と、悟りを開いた如来の法身が不二であるその理由は、一切の諸法が空であり、無自性であるが故である。その故に同体を観することができるのである。さらには一切諸法無自性空というその思想が、法身共同体における衆生と阿弥陀如来の法身が同体となることができるとする、その理論の中心となつていると考えられる。法身共同体は、称名念仏行により、弥陀の法身と衆生の法身との不二の関係を、明らかにすることを説くが、そのための理論が三論教学を含めた一切諸法無自性空というその思想であつたと考えられる。

そしてその役割は、その一切法無自性空であるが故に、弥陀と衆生も



本来不二であり、その故に法身の同体を観することができ、それによって極楽浄土への往生を得ることが出来る。その弥陀の法身と衆生が同体となるという、理論面での中核としての面が強いのではないかといえる。そしてその故に、法身同体観の内容そのものにも繋がるのではないかと考えている。

すなわち法身同体は、あくまでも称名念仏行による極楽往生が中心となっているが、その内容を考察していくと、以下のようにまとめることができる。

法身は『大乘起信論』などの如来蔵思想を中心に、密教的な阿字観の本不生や自性清浄、『中論』の不生などによって説かれる。

一方同体は、真言密教における即身成仏などを背景に、三論教学を含めた一切諸法無自性空無我の思想を中心に、『大乘起信論』における法界一相等によっても説かれる。

もちろん原則的には、この法身と同体の二つが別々に存在しているわけではなく、また厳密に法身を示す内容が如来蔵思想のみで説明されているわけではなく、同体が一切諸法無自性空無我の思想のみで説かれているわけではない。ただその中心となっているのは、それぞれ法身が如来蔵思想、同体が一切空の思想を中心に論が展開されていると見ることができる。

## 五 法身同体思想、永観の往生思想の

### 再検討の必要性

ここまでの考察の結果から、これまで先行研究で共通認識として述べられてきた、永観の往生思想を、三論系往生信仰者としての、三論教学的空思想を説く法身同体思想を中心とした往生思想、と考える枠組みが、必ずしも正確なものではないのではないか、ということが指摘できる。

加えて述べるならば、『往生拾因』の法身同体以外の部分における三論教学の影響も、前述の二箇所以外には見られないのである。

これまでの永観研究は、この法身同体が、三論教学に基づいたものであり、三論宗の枠内で説かれる往生思想であるが故に、この法身同体観が説かれると考えられてきた。もしこの、

「法身同体＝三論僧である永観が説いた、三論教学による空思想を中心としたもの。」

という概念規定が崩れることになれば、これまでの永観研究は、ある一定の見直しをする必要がでてくる。

そもそも永観が、東大寺東南院を本寺とする三論系の往生信仰者であるがゆえに、その往生思想には三論教学の影響があり、その最も影響を受けた部分が、法身同体に説かれる空思想であったと考えられてきた。そこには真言密教の影響や、『大乘起信論』を始めとする様々な諸経論が引用されながらも、三論教学における一切空思想を中心に、法身同体思想は構築されたものであるとされてきた。これは、永観研究のいわば前提となっている。

さらに永観の研究では、この法身同体が説かれることが三論の思想の枠を出ていないということの大きな要因として挙げられる。しかしもし一切諸法無自性空ということの永観の法身同体の中核をなす思想が、三論教学を中心とした思想ではなく、『無量寿経』という浄土往生思想を説く經典も含めた通仏教的な意味であれば、この法身同体が三論的な思想であるという視点、つまりは永観の往生思想の位置づけの、最も根幹となる部分を見直す必要があるのではないかと考えられるのである。

またさらに重要な点は、前述したように、多くの古い史料にも記されているように、永観はこれまで主に三論僧と見られてきたが、永観をただ三論宗の僧としてみるべきではない。例えば永観の生涯における様々な要因を見るに、彼が、真言僧であるという一面を強くもっていること

が、理解できる。

ページの都合上詳細は省略させていただくが、単に永観を三論僧としてみるのではなく、真言僧として見ることも十分に可能なのである。永観が三論宗の僧侶であり、一切空思想を説いているから、三論系の往生信仰者、往生思想とされてきた感があるが、そのような三論という視点でのみ永観を考察することは、誤解を生じる部分があるのではないだろうか。無論、永観の三論僧としての立場や、『中論』を用いていること等があることを考慮すれば、永観の往生思想に三論教学の影響があることは、ある意味で当然のことでもある。しかし一方で、法身団体において一切諸法無自性空を説くにあたり、それを立証する経論の引用において三論系の経論を積極的に用いていないという点を含めて、永観がそれほど多くの三論系の論書を用いていないこと、さらにこのことから、『往生拾因』に説かれる一切諸法無自性空という思想は、三論教学を含めた通仏教的な意味で用いられていると考えるべきこと。これらを合わせて考えれば、永観を考察する際には、三論の影響を考慮しつつも、三論という単一の視点からの考察は十分な注意が必要であるといえる。

## 六 まとめ

以上のように、法身団体における三論教学の影響を中心に考察を加えてきた。今回の考察で指摘することができるのは、以下のような点である。

まずは永観が三論僧であり、その三論教学の影響が『往生拾因』に見られるとされ、これまで、特に三論教学における空思想を中心に構成されていると考えられていた『往生拾因』第九法身団体では、その一切諸法無自性空無我の思想を説くために永観が引用している経論は、三論系の論書でなく、むしろそれ以外の『無量寿経』や『華嚴経』、空海の『最

勝王教秘密伽陀』などによって見ることが取れる。このことから、三論教学の影響を否定するわけではないが、かといって法身団体を一切諸法無自性空無我の思想が説かれているからといって、単純に三論教学の思想の影響と位置づけるのはいささか性急であり、むしろ三論教学を含めた通仏教的な意味での空思想が用いられているのではないかと考えられる。

さらに厳密に区別できるわけではないが、基本的な枠組みとしては、法身が如来蔵思想を中心に、そして団体がこの三論教学を含めた通仏教的な意味での、一切諸法無自性空無我の思想が中心となって構成されていると考えられる。

そして法身団体以外の点においても、三論教学の影響が少ない（はっきり分かるのは二箇所のみ）ことなども合わせて、一切諸法無自性空というこの永観の法身団体の、さらには往生思想の中核をなす思想が、三論教学を中心とした思想ではなく、『無量寿経』という浄土往生思想を説く経典も含めた通仏教的なものであるといえる。そして、永観がそもそも三論僧であると理解するその視点が、一面的なものであり、たとえばその生涯や、それを取り巻く様々な要因から、永観を真言僧であるとも見ることができるのである。

そしてこれらの点から、法身団体、さらには永観の往生思想が、三論的な思想であるという視点、加えて永観が三論僧であるという視点、つまりはこれまで行われてきた先行研究における、永観の往生思想の位置づけの、最も根幹となる部分を見直す必要があるのではないかと考えられるのである。

今回そこまで考察することができなかったため、今後の課題となってしまうが、さらに重要な点は、永観の法身団体の中核をなす思想が、『無量寿経』という浄土往生思想を説く経典も含めた通仏教的な一切諸法無自性空の思想というものであるならば、永観の立場、さらには永観の往

生思想、これらをどのように捉え、さらには位置づけるべきなのか、このような点をもう一度考え直す必要があるのではないかと考えている。

## 註

- (1) 『群書類従』第四輯五八五頁上
  - (2) 『大正蔵』八四卷一九四頁上
  - (3) 『浄土宗全書』十五卷三九四頁下
  - (4) 井上光貞『日本浄土教成立史の研究』四〇七、四二二頁。  
一九七五。山川出版社
  - (5) 白井元成『往生拾因』と永観の念仏」親鸞教学六八号四頁  
一九九六
- また中国においても三論と浄土往生思想の關係は既に見られるのであり、『無量寿経優婆塞舍願生偈註』（『往生論註』）を書いた曇鸞（四七六、五四二）は、三論と大智度論に通じており、菩提流支から『観無量寿経』を授かり浄土教に専心したとされる。また三論教学の大成者である吉蔵（五四九、六二三）には『無量寿経義疏』、『観無量寿経義疏』といった著作がある。
- (6) 『群書類従』第四輯五八二頁
  - (7) 『三會定一記』第一『大日本仏教全書』一二三卷三〇九頁上
  - (8) 『浄土宗全書』十五卷三八三頁下
  - (9) 『浄土宗全書』十五卷三八七頁上、下
  - (10) 明山安雄『永観・珍海の浄土教研究序説』『仏教大学研究紀要四六号』五六頁。一九六四
  - (11) 香月乗光『法然浄土教の思想と歴史』三三四頁。一九七四
  - (12) 浅井圓道『永観考―源信・法然との対比―』『大崎学報』一四五号  
二二頁。一九八八
  - (13) 大谷旭雄『法然浄土教とその周縁』乾七七頁。二〇〇七。山喜房仏

## 書林

- (14) 大谷旭雄『法然浄土教とその周縁』乾七七、七八頁。二〇〇七。山喜房仏書林
- (15) 『浄土宗全書』十五卷三八七頁下
- (16) 『浄土宗全書』十五卷三八七頁下
- (17) 『浄土宗全書』十五卷三八八頁上、下
- (18) 『浄土宗全書』十五卷三八八頁下
- (19) 『浄土宗全書』十五卷三八八頁下
- (20) 『浄土宗全書』十五卷三八九頁上
- (21) 僧肇は、後秦の学僧で鳩摩羅什の門下である。『不真空論』、『般若無知論』、『物不遷論』、『涅槃無名論』などの著作があり、この四本が『肇論』としてまとめられている。この『肇論』は後に吉蔵などによって注目され、三論宗において重要視されたという。永観の引用も、この三論教学への影響を考慮してのことではないかとも考えられる。
- (22) 『大正蔵』四五卷一五三頁上
- (23) 『浄土宗全書』十五卷三八八頁下

当論文の研究目的は、永観（一〇三三～一一一一）の往生思想を考察することであった。

これまでの研究における永観の位置づけは、源信のよる『往生要集』等が撰述された平安時代中期と、法然、親鸞による浄土宗、浄土真宗の開宗に至る鎌倉時代初期、その中間にあたる平安時代後期に永観が活躍したというその時代的な背景と、さらには著作における善導の『観無量寿経疏』『散善義、就行立信釈』の引用などから、法然に先駆する南都三論宗の浄土往生信仰者として位置づけられるのが一般的であった。その先行研究において考察されてきた部分も参照しつつ、当時の社会的な背景も考慮に入れながら、その生涯や往生思想を考察することにより、永観の生涯、さらには永観の往生思想の新たな一面を見出すことが当論文の主旨である。

まず第一章において、永観の生涯を伝記、史料、先行研究等を中心に考察を行った。ただ永観の生涯については、既に先行研究によってかなりの部分が明らかになっているため、生涯については、第一節において、幾つかの点を除いて、先行研究を参照しつつ、要点をまとめることにのみに留めた。むしろこの第一章の中心は、第二節において、特にこれまで指摘されてきたような南都三論僧としての永観ではなく、真言僧としての永観に焦点をあてたことにある。現存する永観の著作や様々な史料、寺院、人物、著作、先行研究の各要因から永観が真言僧であるという位置づけを明確にした。

他にも真言僧永観という点のみならず、『元亨釈書』や『扶桑隱逸伝』など幾つかの伝記に表れる教師としての一面に焦点を当て、その記される内容から、活動などを考察し、教師永観という位置づけを行った。

以上が第一章の内容であり、基本は、永観の生涯をまとめつつ、真言僧という位置づけを明確にすることに主眼を置いた。

第二章においては、第一章における考察で導き出された、真言僧永観という点を基本に置きつつ、永観の往生思想における、滅罪、菩提心、仏身観、臨終行義、真言陀羅尼読誦といった点を考察し、さらにこれらの考察を通じて、永観の往生思想における真言密教の影響を考察し、真言密教の影響をより深く検討した。その結果として、滅罪や菩提心などを検討した中では、共に密教の中でも特に阿字観の影響が大きく、阿字観や『大日経疏』に関連する、自性清浄心や浄菩提心といった点が密教的影響として挙げられる。

またこの密教の影響の考察は、その内容から必然的に『往生拾因』第九法身同体が考察の中心となったが、この法身同体の考察をしていく中で、これまで指摘されることがほとんどなかった如来蔵思想、特に『大乘起信論』を中心とする影響についても指摘することができた。

第三章では、まず第一節にて『往生拾因』全体における『大乘起信論』の影響を検証した。第二節では、永観の往生思想における、難行と易行の関係について考察を加え、第三節では、永観の往生思想において重要な意味を持つ、「一心」について考察を加えた。最後に第四節では、これまでの滅罪や菩提心、一心などの様々な要因、問題も絡めて機根観を論じた。機根観という視点から見えてくるのは、永観が主に二種の機根を念頭において、往生思想を構成していたという点である。そしてこれらのような永観の機根論の背景には、永観の衆生観が存在する。その機根観、衆生観の存在が、永観の往生思想の様々な点において二面性を有する背景にあるといえる。以上のような要因から、永観の念仏行は、全体として二面性を有しているという結論に辿りついた。

最後に第四章において、『往生拾因』の注釈書の一つである、西誉聖聰の『往生拾因見聞』の翻刻をおこなった。



結果的には、当初の目的であった密教の影響を考察するという点においては、永観が真言僧であるということを明確には出来たものの、筆者が予想していたほど密教の影響を探ることができなかった。反面予想していなかった『大乘起信論』の影響や、三論教学の影響の再検討、「一心」の定義など新たな視点を指摘することができた。主要な点以外にも、多くの新たな点を指摘することができたが、同時に未解決の問題やさらに考察を必要とする部分も多く残り、今後さらに永観について考察を加えていく必要があると考えている。